

美しい夜景を創るために

醜くなった東京の夜景

最近、東京の夜景が醜くなったと、私は感じている。それはLEDの普及に伴って、高層ビルが意味もなく、様々な色光で頂部を飾るようになっていたためである。

照明デザインという仕事柄、夜景を見る機会が多いのだが、仕事を終えて自宅に戻る車窓から、高層ビルの上方に点灯する赤や緑、青などのLEDのライン照明の濫用が、いやでも目に入ってくる。

都心の高級ホテルの外観上部に赤や緑の光のラインが入っていたり、青の濃淡の縦縞が動きに伴って光っていたりすると、思わず目を背け

てしまう。

LEDは電気の消費も少なく、優れた光源ではあるのだが、小粒でも直射光は鋭く、水晶体が年齢と共に黄濁していく宿命を持った人間の眼球にとっては、時には暴力的に作用するものである。

かつて醜く下品な光も多いと悪口を言われたネオンは、商業的な広告という目的が明確にあり立地はそれなりに限られていたので、住宅地にまで光が侵入して来ることは稀であった。しかし現在では、近くの高層ビルのLED照明が、近隣に光を撒き散らすことが多い。

東京の夜景を美しく品格あるものにするために、せめて色光のガイドラインを作成して、一

般の建物には守ってもらおうようにできないものであろうか。

無駄な街路灯の乱立

数年前、六本木の交差点と六本木通りの照明デザインにかかわったことがあった。六本木は海外にも知られた地名であるが、交差点の上には首都高が通り、快適でも美しくもない場所である。何とか夜間だけでも特長ある景観にならないかと、首都高の高架下に白色のLEDを配置した。

その後、東京都の依頼を受けて、その周辺の六本木通りに、交差点の照明と関連したデザインの街路灯照明を計画した。

その時の調査で驚いたのは、六本木通りには国道用のハイウェイ灯と、都道の道路灯と商店街の街路灯二種類の合計四種類の街路灯が設置されていたのである。当然、夜になると四種類の光が灯り、周辺の店舗の光も加わって混然となる。

東京の中には注意して見ると、実に様々な商店街の街灯がある。これは東京都が地域振興のために補助金を出していることにもよっている。銀座、赤坂、渋谷といった繁華街も通りごとに違う街灯がついているし、私鉄の駅前商店街のほとんどに、独自の街灯が設置されている。そして、それらの大半は、街にとって好ましいものではない。

商店街の街灯は、むしろ公共デザインとして、夜の街に安心安全をもたらす機能を持つことが第一である。そこに若干の地域性が入っても良いが、できるだけ目立たないものが好ましいのである。むしろ商店街にとっては、店の外観や内装が目立って、その街の個性が形作られることが重要である。

2020年をチャンスに

東京オリンピック・パラリンピック競技大会が開催される2020年は、もう目前に迫ってきている。前回の1964年東京大会のような

熱気と期待の盛り上がりには残念ながら及ばないように思えるが、これは日本が成熟社会になつてきた証ともいえよう。

しかし、これを機会に電柱を地中化しようという計画が進んでいて、ほっとしているのは、私だけではないだろう。

今やアジアの諸都市と比べても、日本の都市景観は見劣りがする。緑が少ないことや電柱の林立、蜘蛛の巣のような電線には目を覆いたくなる。

二〇二〇年までに電柱を地中化することを迅速に行って欲しい。そして、地方都市もぜひこれに続いて欲しいものである。

話を夜間景観に戻すと、二〇二〇年までに少しでも東京の夜景を美しくするためには、早急に専門家も加わって「東京夜景ガイドライン」を作成することである。

都民皆が認めるランドマークは、華やかに光を灯し、他の一般の建造物には節度ある調和のとれた照明を用いる。道路照明は機能を優先し、商業地区には街の夜景を損なわない公共性重視の安心安全のための街灯を設置する。まずは、現状の混在を整理することも不可欠である。

そして、何よりも大切な電気エネルギーを有効に使っていくことを関係するすべての分野の人々と都民と一緒に考えていくことであろう。



茫漠と広がる東京の夜景。右手前より左中央へ隅田川が伸びているのが見える。(写真提供：(株)石井幹子デザイン事務所)

照明デザイナー
石井幹子
Motoko Ishii

